

私の小学生時代

福井 崇時

名古屋大学名誉教授 2010. 9. 20.

入学の翌年に満州事変、次の年に上海事変(第一次)、卒業直前に2.26事件が起こり翌年に日中戦争が始まった。私達が受けた教育が戦争に向かう国の政策にてどのように影響されたかは、私達は知るよしもなかった。6年間の小学生時代を振り返る。記憶による記述だが、同窓の会合で友人との話や資料にて確認した箇所もある。

1) 大阪市立精華小学校 2) 担任は北川寛治先生 3) 士族と平民 4) 1月10日の十日戎は学校は休日 5) 夏休みの宿題 6) 青バスと巡航船 7) 厄年の厄払い 8) 行商 9) トマトの味 10) 回虫退治のマクニン 11) 蠅、蚊、蚤など 12) 歯ブラシの使い方の指導 13) 父の句会 14) 祖母 15) 浜寺の水練学校 16) 室戸台風 17) 昼食 18) 教育勅語 19) 夏の土用の蚕ノ社 20) 夏期休暇中の避暑合宿 21) 秋の運動会 22) 組長選挙 23) 担任の北川先生ではない先生の授業 24) 戎橋から心齋橋筋へ 25) 戦争の影響 26) 2.26事件 27) 中学校、商業学校受験への特訓 28) 電車通学の楽しさ 29) 同級生の面々 30) キタ・セクスアリス精華小学校版 31) 中学校受験合格 32) 地下鉄御堂筋線 33) 戦後の精華小学校

1) 大阪市立精華小学校

昭和3年か4年の4月に精華幼稚園に入園している。しかし家からの電車通園が心配だったのと集団に馴染めず登園しなかった。いつから幼稚園へ行き出したか不明だが、卒園時のアルバムを貰っている。その表紙には右から左へ篆字で書かれた文字が印刷されている。普通の文字にすると「昭和5年3月保育済記念帖精華幼稚園」となる。このアルバムの写真によれば私は高濱保姆の親切なご指導により黄組で卒園している。

父は天王寺師範附属小学校を受けさせている。母に連れられて平野に在る学校へ行った。面接の先生が何を質問されたか覚えていないが、厚紙で作られた動物の胴体に凹みがある。首や脚をつけて完成せよと言われた。一箇所だけ脚と思われる所に凹みが無いのに脚を置かねばならぬものだった。しばらく試みてもうまく置けないので、もたもたしていたらもうよろしいと言われたのを覚えている。結果は不合格だった。

昭和5年(1930年)4月、大阪市立精華小学校に入学した。

父の方針による越境入学である。同じような生徒が組に10名程居た。精華校区の親戚に寄留した。この家は戎橋筋にある寿司店「すし虎」で母の姉の嫁ぎ先だった。幼稚園で同じ組だった従妹がいた。私の家は南海電車難波駅から2つ目の萩之茶屋駅を西へ歩いて数分の所。

精華小学校の所在地は当時の地名で南区難波新地一丁目。明治6年(1873年)の開校、昭和5年7月に新校舎が落成。私達はこの新校舎での1年生だった。南海高島屋百貨店から戎橋筋(心齋橋筋)を北へ20メートル程行き道幅が広がる所の右側に正門がある。道から少し入り込んでいるので目立たない門である。校舎は地下1階、地上4階の鉄筋構造。北東の鬼門に当る所、校舎と塀の間の空地に小さな祠がある。南翼は1階のみで幼稚園となっている。校舎の4階は2年制女子家政高等部。地階と便所を除き、全室の床、廊下、階段の床も板張り、壁も高さ1メートル程は化粧板の板張り(年2回油引きがされた)。階段の手摺も丁度良い高さに木材の覆い、格好の滑り台となった。廊下も含めて全室にラジエーターがあるスチーム暖房。地階から4階までのエレベーターが2箇所(生徒は単独では乗れない)。理科、音楽、図画、工作の特別教室と畳敷きの作法教室があった。グランドピアノが4階の講堂、1階の雨天体操場、音楽教室、幼稚園と計4台。廊下の暖房は江田校長先生が生徒の体の抵抗力が弱くなるし余分なものだとして閉じられた。

机は特製。天板は習字等の時に水平にして手前に引き寄せられる。常には前方に押しやり少し傾斜している。天板の前方10センチ程に蝶番が付けられていて、天板は手前の方で上げられる。腰掛けは少し波打っている板で立つ時に脚が真っ直ぐになるように跳ね上がる。机と腰掛けの支柱は夫々鋳物で、2本の木の角材に取り付けられている。腰掛けの支柱が取り付けられている辺りに蝶番で腰掛けを机の天板へ傾け全体の容積を小さくできる。この特製机の一番の特徴は、生徒の座高と脚の長さに合わせて、そ

れぞれの高さが調節できる構造になっていることである。学年の初めと夏休み開けに校務員さんが予め身体検査で測定されている各自の座高と膝下の長さに合わせて調節してあるが、微調整のため教室へ来て下さる。1年後に進級すると教室も代わる。新学期には既に高さが調整された机に生徒個々の名前が書かれた紙を貼り並べられていた。

校区が大阪南の繁華街だから飲食業、商家や花柳界で直ぐに跡継ぎとなる者と中学校或は商業学校進学を目指す者とがほぼ2対1の割合の生徒構成だった。越境入学者が多い進学校でもあった。私達の学年は次に述べるように1年次から男子と女子は別組で学年初めの生徒の組み替えが全くなかった。

2) 担任は北川寛治先生

担任は北川寛治先生、天王寺師範ご卒業後の6年目に私達の学年を受け持たれた。後に先生から聞いたのだが、校長に許しを貰って、生徒は6年間学年毎の組み換えが無く担任の先生も代らない教育を試みたとのこと。この試みは後にも先にも一回だけで、教育効果はよくは判らなかつたと言っておられた。私達の記憶では隣の組の生徒との交流がなく、何かにつけて隣の組との競争意識が強くなった。我々の組の者達は互いに気心が通じ合い仲がよかった。

休み時間も北川先生は教室におられた。授業中や休み時間でも、先生は我々の行動に、その時の状況に応じて、厳しく指導された。或る時、運動場で何か起り騒がしい声が出た。我々は運動場へ行こうとしたその時、先生は「大勢の者が行くからそれにくっついて行く事は絶対にしてはならぬ、訳が判らないまま人について行く事は良くない事だ」と強く諭された。

先生が板書されている時に我々がこそこそと私語していた。先生は振り向きもされず、板書を続けられながら「先生のメガネは後も見えるメガネである、某某静かにしろ」と。5年6年と同じ生徒を受け持たれて来たから、声でその生徒を特定できるようになられたのだろう。そして先生は向き直って「人が見ていないから、誰も居ないから判らないと思って良くない事をしていても、必ず何処かで誰かが見ている。誰もいない所でも、いつでも正しい行いをしなければならない。」と諭された。

先生のご自宅は摂津富田、赤大路。東海道線上りで摂津富田駅の手前、左側に見える白壁囲いの大きな家。先生は師範学校へ通った時の事をよく話された。家の竹藪から掘り出してきた根っ子で作った鞭を幾本も持っておられ、授業中の居眠りや私語をすると、また、廊下を走ると、その鞭が飛んでくる。さらに鞭が折れるくらい厳しく叩かれた。我々への「しつけ」は厳しかった。

先生は幾つかの小学校の校長を務められ昭和51年に逝去された。

3) 士族と平民

生徒個人の学籍簿だったか通知簿だったか、何だったか覚えていないが、お互いに見せ合う事ができる記録用紙のようなものに生徒の名前、親の名前、住所が書いてあり、親の名前の下の欄に「士族」か「平民」という文字があった。何となく差がありそうだが、我々の間では何も区別するものがない。「士族」と記入されていた者は少なく、殆どが「平民」だった。自分は士族の子供だと云う者が「士族は平民より上だ」と言ったが、彼は特に我々平民の子供と違う所がないので、それがどういふ事なのか当時の我々には理解できなかった。3年生か4年生の時からはこのような記載の欄はなくなっていた。

4) 1月10日の十日戎は学校は休日

1月10日の十日戎には難波新地の芸者衆が宝恵駕籠を連ねて今宮戎神社に参詣に行く賑やかな行事がある。学校周辺は大勢の人出となる。雑踏による生徒の事故を防ぐ為とで学校は休みとなった。私は「すし虎」の二階から練り歩く宝恵駕籠の列を眺めていた。

5) 夏休みの宿題

7月25日の天神祭が済むと1ヶ月ほどの夏休みとなる。学年別の生徒全員に表紙に北浜の難波橋橋詰めの獅子の像の絵が印刷された宿題帳が配られ毎日1頁ずつ色々なことを指示に従い行い、記入する

ことになっている。この宿題帳の表紙のデザインは6年間変わらなかった。毎夏の必修の宿題帳だった。

9才年上の兄は高校生から大学生になっていたから、ずっと早くに夏休みになっていた。自分も早く長い夏休みになる中学生になりたいと、羨望の思いで兄を眺めていた。

6) 青バスと巡航船

青バスの形をした焼き物の煙草の灰入れがいくつかあった。焼き物の色は薄い緑色だった。走り出した市営バスの記念品か宣伝の焼き物だったと思う。バスに乗ったという記憶はない。堀江や松屋町の親戚へ行くのは難波からの市電だった(途中で乗り換えをした)。或る日、父が巡航船に乗りに行こうと私を連れ出し、心齋橋まで行き石段を降りて、長堀川に停まっている巡航船に乗った。父の説明では電車やバスと同じ大阪市市営の船だとのこと。川筋から見る町の光景は道路からでは見られない家や倉庫の見慣れない姿で大変面白かった。何処をどう船が走ったか判らなかったが堀江の親類の近くで船を降り石段を上って地上にでた。巡航船がいつまで運行されていたかなどの記憶は全く無い。ただ一度だけ父と一緒に乗ったという記憶だけである。

7) 厄年の厄払い

或る日、朝から祖母と母が大きな鍋で小豆を沢山茹でている。母が言うには父が厄年なので厄払いをする「ぜんざい」を沢山作っていると。そして母は入口を開けておき来る人に「ぜんざい」を一膳差し上げるのだと言う。祖母が言うにはそうする事で父の厄が来た人に持って帰ってもらえるのでお礼に「ぜんざい」を食べてもらうのだと。来る人は大体子供で大人は少なかったという記憶である。

そう言えばいつだったか、母があの家では今日は厄払いの「ぜんざい」を作っているから、行って「ぜんざい」を頂いてきたらと私にすすめたことがあった。

厄払いをする家はどの家かという情報は直ぐに伝わってくるらしい。入口に何か目印のようなもの、提灯を吊るしていたか家紋がついた幕を張っていたような記憶がある。

8) 行商

夏休みの時によく姿を見る行商、もの売りは、天秤棒で前後に売り物をぶら下げている金魚売りや沢山の虫籠とその幾つかにキリギリスが入れられていてやかましく鳴いている籠を担いで歩いている虫屋だった。金魚売りは「キンギョーヤ キンギョッ」と売り声を叫んでいた。虫屋は黙って歩いていた。

夕方になると鱧の洗いを売る魚屋が天秤棒を担いで通る。掛け声は覚えていないが母が呼び止めて父の夕食のために鱧の洗いを買うのを眺めていた。鱧は綺麗に磨き上げた白木の桶に入れられていた。これも綺麗な白木の俎板の上で鱧の身を切り、包丁を器用に扱いきよく母が言うように骨切りをしてお皿に入れて母に渡した。

時々泥鰌売りも通った。この泥鰌も母は父の好きな柳川にすると買って買った。幾匹かの泥鰌が桶から掴み出されてその場で腹を裂かれていった。

羅宇ラウ仕替え屋と言うのが湯気を勢いよく出す湯を沸かしている釜を設えた小さな屋台車を引いて来る。勢いよく出る湯気で笛を鳴らしているから遠くからでも来るのが判る。この湯で煙管キセルの掃除をし、新品の竹の管を売るのが商売である。父達は刻みたばこを煙管で吸っていた。煙草を詰める部分や吸い口、中間の竹の管にはヤニが溜る。常に丈夫な和紙で紙縫いを作り掃除をせねばならないものだった。辞書にキセルやラウはカンボジアとラオスの言葉が語源、khsier=管、Lao=ラオス、ラウとある。

9) トマトの味

羽衣の叔父の家では叔母が畑をしていて色々な野菜を育てていた。叔母は保守的な私の家と違って大変進歩的で新しいものを積極的に取り入れていた。私の家には無い何かがある。確か私が小学生の頃はトマトは珍しい野菜だった。叔母はそのトマトを植えていて収穫したトマトを三時のおやつ代わりにそして食事の時に食べさせた。そのトマトは大変に青臭い独特のキツイ匂いがして

口には馴染まないものだったが、叔母はトマトを薄く切りソースの匂いと味で臭みを紛らす方法で食べさせた。

1 0) 回虫退治のマクニン

我々の小学生時代は回虫などの寄生虫を体内に持っている者が沢山いた。食餌の野菜等に着いている卵を取り込むので、一番身近かで一番多い寄生虫が回虫だった。回虫は腸に寄生し栄養を横取りするだけでなく体内のあちこちに移動し時には脳へ上り大きな害をされると言われている。年中行事として回虫退治の薬を全校生徒が飲まされる日があった。海人草という海藻から作られたマクニンと言う何ともたとえようがない匂いと味がする液体が小さな湯呑みに入れられている。生徒は順番に各自、此の湯呑みを受け取りグイとひと飲みにして手洗い場へ走り、口を漱いで、貰った飴玉を口にした。この回虫退治のマクニンは6年生の時まで飲まされた。

1 1) 蠅、蚊、蚤などなど

蠅はいつも何処にでもいて家庭には「蠅叩き」が何本もあって、蠅をうまく叩き殺す技術を競うような状況だった。市場の食料店や食堂では、天井から粘着テープを幾本もぶら下げていた。色々なテープが売られていた。蠅がこのテープに触れると引っついてしまう。

食事の準備でお皿などをちゃぶ台に置くと、布製の網を4本の針金の間に張った雨傘のような構造の覆いを被せ蠅を防ぐ道具は各家庭にあった。

ゼンマイ仕掛けでゆっくりと回転する円筒に酢などを塗り蠅がとまって酢を舐めている間に円筒が回り蠅が箱の中に閉じ込められて仕舞う蠅取り器があった。

下水道が未整備だったから、汲取式トイレ等の発生源が多くあり人間と共存している状態の不衛生な環境だった。

父が河鹿蛙を飼育していて、蛙の餌に蠅を与えていた。生きた蠅を捕まえる道具があった。その道具というのは細長いガラス管で上部は漏斗のような形、下部は小さな球になっている。天井にとまっている蠅をこの漏斗の部分でうまく取り込むと蠅は飛びながらガラス管の下へ落ち球へ入る。何匹か蠅を捕まえると河鹿蛙の飼育網に漏斗部分を当てて蠅を飛び出させる。河鹿蛙は直ぐに蠅を巧みに舌で捕まえパクリと口に入れて口をぱくぱくし目をくりくりと前足でこする。

蚊退治には除虫菊から作られた蚊取り線香がどの家庭、どの店舗にもあり煙を棚引かせていた。夜は蚊帳を吊るして寝るのが普通だった。蚊を入れないよう体をうまく蚊帳の中に入れるのに子供ながらの技術が要求された。蚊帳を吊れば空気の流れがなくなり、寝床は大変に暑くなり、寝苦しくなる。蚊の発生源の水溜まりが方々にあり蚊と共存状態だった。

蚤は厄介なものでなかなか退治できない虫で蚤取り粉を寝蒲団等に撒くのだが、効き目があったという記憶はないし、人間に対して安全な薬かどうかよく判らなかつた。

虱は動きが鈍いので捕まえて殺すのは容易だが増える方が速いので徹底的に退治するのは衣類等を熱い湯に長時間浸してやっつけるのが良いと言われていた。女の子が頭髪を洗わないと直ぐ毛虱が発生する。「すし虎」では南京虫に悩まされていた。退治する薬がないようで特殊な木製の棒に虫が入って来るのを待って退治していた。

これらの虫から開放されるのは下水道などの環境整備がされる敗戦から長い長い年月が経過してからの事であった。

1 2) 歯ブラシの使い方の指導

4年生の時だったと思うが、歯ブラシとコップを持って来るようにと言われた翌日、運動場に集れと号令がかかった。コップに水を入れて整列をして待っていると白衣を着た男性が壇上へ上がって、「これから歯を綺麗にする歯ブラシの使い方を教えます」と言い、大きな歯ブラシを使って先ず持ち方を教える。次に口の中に入れた歯ブラシの動かし方を壇上で大げさに動かして教える。我々は実際に自分の歯

にブラシを当てて、説明されている順番に歯を奇麗にしていった。ブラシをコップに入れてクルクルと動かすと、コップの水は白く濁ったのでびっくりした。壇上の男性は「コップの水が濁ったのは歯に着いていた食べ物の残りカスです。これを取らないと虫歯になります」と説明した。

当時は現在と違って歯にブラッシングをすることに余り関心がなかった。特に子供は歯を丁寧にブラッシングする事は殆どなかった。だから学校でこのような指導をされたのだと思っている。

1 3) 父の句会

父は俳句の青木月斗氏に師事している時には家で句会を開いていたらしい。私へは静かにするようにと厳命されていたので部屋から離れていたし、部屋は閉め切っていて物静かなので父達は何をしているのか知る由もない。母が幾つかの銘々皿に墨汁を入れて運び込んだ。しばらくして今度は銘々皿に菓子を載せて半紙と共に運び入れた。私は想像した。父達はあの菓子里に墨をつけて食べているらしい、おいしいのだろうか。このおかしな想像の真相が判るのはずっと後のことだった。

1 4) 祖母

安政5年(1858年)生まれの祖母が家計を取り仕切っていた。当然の事として我が家は何かに付けて保守的であった。祖母は初めての内孫の私を溺愛したようである。大変健脚で旅行好きでもあった。新聞社が主催する団体旅行にはよく参加していた。祖母の三味線は子供の私の耳でも澱みの無い名調子に聞こえた。三味線は4、5棹持っていて撥とともに時々替えていた。左手の指は眠っている時でもツボをおさえるしぐさのようにピクピク動いていた。2時間も3時間も休まずに弾くことが常だった。夕食後には仏壇にお経を唱えるのが日課だった。宗旨は浄土真宗。「キミヨウムリョウジュニョライ ナムフカシギコウ・・・」と唱えていた祖母の声は今もお経の言葉と共に耳に残っている。本願寺大谷の左藤義詮さんの報恩講に参加し義詮さんの講話は有り難いと言っていた。義詮さんは私の中学の友人左藤恵君の父であり大阪府知事にもなった。祖母は夜なべで半紙を小さく切って底辺が2寸程の三角形の袋にし、その中に米を二、三十粒入れたものを沢山作っていた。大軌(大阪電気軌道=現在の近鉄奈良線)の石切駅から生駒山側へ登る小道がある。その道筋に小さな石の地藏や仏像などが点々と並んでいる。祖母は先の米粒の入った紙袋を一つずつ置いて手を合わせて拝んで行く。5、6年生の時に連れられて行った。袋が無くなると引き返して帰宅の電車に乗った。祖母の話では四天王寺や一心寺へお参りする時も米粒の入った袋を持って行き、賽銭箱へ入れるとのこと。

祖母は年に一、二度が大丸百貨店へ連れて行き玩具を買ってくれた。難波から徒歩での往復だったが祖母は天狗と言う店で草履を買い、芝翫香と言う店で何かを買い、大丸の食堂で甘い物を注文してくれた。

祖母は私が七高2年生になる前に鹿児島に戻っていた昭和17年3月18日に逝去した。85歳だった。

1 5) 浜寺の水練学校

4年生の時(昭和8年)、父が8月の1ヶ月の間、浜寺で毎日新聞社が水練学校を開いていることを、「すし虎」の3女から聞き、小生を入学させた。「すし虎」の3女は水練学校の助手をしていた。また、父の知人、「すし虎」の知人でもある人が教官だと言うことが判った。

訓練は午後の早い時間から2時間ほど。萩之茶屋から南海電車で毎日通った。8月の中程からは、羽衣の叔父の家に泊まり少し遠いが歩いて通った。浜寺駅や羽衣駅から海への道筋には氷が主の飲み物を売る店やおでんを売る店など多くの屋台が連なっていた。

訓練の初めは長い木綿の晒で褌を絞める事から。褌絞めができると熱い砂浜に座り平泳ぎの足の動きを練習する。腹這いではなく上半身は起きた状態。

短時間海に入り海水にも慣れる訓練があった。訓練が進むと白い帽子に黒い布で細い5センチ位の長さの線を縫い付けてもらった。線の数が増えることで意欲を引き出す効果を狙ったのだと思う。

1週程して、帽子の黒い線が3本となり実際に泳ぐ訓練が始まった。

平泳ぎを蛙泳ぎと言っていた。これができるようになり段々と泳ぐ距離が延びた。泳ぐ方向は岸に平行、教官先生が子供一人一人についておられた。

時にはサボって叔父の家にてトンボを取っていた。ヤンマを捕る特殊な方法を特技としていた。サボった情報は「すし虎」の3女から父に伝わり内緒にはできなく直ちにお叱りの声が来た。

3週後には100メートル程休まずに泳げるようになり、帽子の黒い線は頭を1周する1本になり初等の訓練が終了し免状をもらった。此の頃で水練学校は終わりになった。

16) 室戸台風

昭和9年9月20日の朝、朝食を食べていると突然強風が吹き始めた。風は段々と強くなり家から出られる空模様ではなくなって来た。そうこうするうちに風はますます酷くなり、遠くの家屋根瓦がはがれて、きりきりと舞いながら木の葉のように水平に飛んで行くのが窓から見え、家が風と共にゆさゆさ揺れた。昼過ぎにやっと風が収まった。電線が方方で切れているらしく電気は来なかった。

南海電車が午後遅くには運転し始めたというので早速父が難波の「すし虎」へ行き羽衣から登校していた従妹の状況を見に行った。父が帰宅後の話によれば、学校では風が酷くなる前に児童を帰宅させたようである。従妹は無事に「すし虎」で過ごしていて、父が羽衣の家に連れ戻した。

その日の夜は電気が来なかったが、ガスは供給されていたらしい。父はガス灯をつけた。翌日の新聞では、四天王寺の五重塔が倒れ、他の建物も倒れて避難していた人達に死傷者が出たとか、大阪湾沿岸は高潮で家屋が水没し死亡者が多数でたとか、小学校の校舎が倒れ、女の先生が梁の下敷きになったが児童を無事に庇って助け自分は死亡したとか、省電が瀬田の橋の上で強風で脱線し傾いて止まったとか、色々な被害が報じられていたことを父が話してくれた。

17) 昼食

昼食の弁当は母親や女中達がそれぞれ校務員室まで届けに来た。冬は校務員さんが暖めておき、教室の各児童へ配って回った。6年生の時は家から10銭銅貨を1枚貰って、昼食時に外へ出て戎橋筋のパン店、木村家(店の印が丸の中にキ、マルキと呼んでいた)の分厚い蠟紙に包まれたサンドウィッチ(概ねジャム)を買うか、戎橋筋入り口の「天扇すし店」(海苔巻き1本が10銭、もじってテンセンすし)で海苔巻き1本を買うか、親戚の寿司店「すし虎」に行くかした。この「すし虎」では私の顔を見ると子供用の巻ずしを作ってくれた。作り立て海苔巻の海苔が子供の口中では硬い紙のようで美味しいとは思わなかった。

冬期この店に入る時、店の入口には蒸し寿司を暖めている蒸籠が置かれている。その横を通るのだが、蒸籠から吹き出す湯気が丁度顔の辺に当たり酔の臭いに咽せた。

放課後は学校で遊ぶか、「すし虎」の東が法善寺南入口でその前の道路で三角ベースの野球をした。

18) 教育勅語

元日、紀元節(2月11日)、天長節(昭和天皇の誕生日、4月29日)には朝の定時に登校し、学年、組毎に並んで講堂に入り中央最前列に立っておられる礼装の校長先生が行う行事を見守っていた。全員の整列が済むと講堂の中央奥の白いカーテンがおもむろにキリキリと音を立てて引き上げられると天皇と皇后の写真の額、御真影、が見える。最初に「君が代」を歌う。そして、礼服を着て白い手袋の教頭先生が御真影の前の台上に置かれた大きな黒漆塗りの盆(盆には黒漆塗りで房飾りの紐で結ばれた箱がある)を恭しく目の高さに捧げながら、校長先生の前に持って来られる。校長先生も白い手袋、先生はおもむろに紐をほどき箱の蓋を開け、巻物を取り出す。盆を持って来られた先生は横にある台へ盆を置き、「最敬礼」と号令を掛けられる。天皇皇后御真影への礼である。校長先生は巻物を開き肩幅いっぱい捧げ持ちおもむろに教育勅語を声高に読み始める。我々は少し頭を下げて「チンオモウニワガコウソコウソウ」で始まり最後の「ギョメイギョジ」の声までそのままの姿勢でいるよう厳しく教えこまれたが、時々上目使いで校長先生の後姿や周りの様子を眺めたり隣の友人と目配せをしてにやりと薄笑いを

した。校長先生は巻物を巻き戻すと、教頭先生が先の盆を持って来られ校長先生が巻物を箱に入れ紐を結び盆は元の台に戻される。一同最敬礼をしている間にカーテンが降ろされる。校長先生は我々にその日の行事について話されて、我々は歌を歌う。元日は「トシノハジメノ、タメシトテ」で始まる1月1日の歌、紀元節では「クモニソビユルタカチホノ」と紀元節の歌、天長節では「キョウノヨキヒハ、オオキミノ」と天長節の歌、全ての行事が終わって、教室へ戻る。教室では大きな紅白の饅頭が入った箱が配られ下校となる。急いで家に帰ると、正月ではそれから家族全員で雑煮を食べ正月行事が始まった。紅白饅頭は家族で分け合った。

教育勅語は始業式終業式でも校長先生が読まれたような記憶がある。

勅語の解説や説明をされたのかどうか全く記憶がない。

19) 夏の土用の蚕ノ社

夏の土用に蚕ノ社の泉から流れる小川に足を浸すと、冬に風邪をひかず霜焼けにもならないという言い伝えがあり、毎冬に霜焼けに悩む私を母は連れて行った。京都四条大宮から嵐山電車に乗り蚕ノ社駅で降りる。駅と言っても屋根がある駅ではない。蚕養神社と彫られた大きな石の灯籠（彫られた文字は特殊な文字で辞典にはない、このように読むと思われる）と石の大きな鳥居があるだけで、一面の稲田である。一本道の左横の小川には水が滔々と流れ、前方にこんもりした森が見える。其処が蚕ノ社である。神社の境内では泉からの小川の上に臨時の台場を作り幕を巡らせて足を小川に浸す所をしつらえてある。大勢の子供や大人達が小川に足を入れていた。小川の水は水量豊富で冷たく透明であった。ご利益は特になく、やはり霜焼けに悩んだ。

後年、蚕ノ社について調べた。雄略天皇の時代、1500年前、に中国より秦氏一族が養蚕、織物、染色、土木、造酒、管弦音曲等の技術を持って帰化した。養蚕、織物、染色を守る神として此の社を建てたとある。創建は推古天皇の時、1300年前で木島坐天照御魂（このしまにますあまてるみたま）という神社である。泉は三本柱の鳥居の中央にあり、湧水の池は元糺の池とよばれている。元というのは、儀式の「糺」を下鴨神社の境内へ移し「糺の森」としたので、池は「元糺の池」というようになった。太秦ウズマサの広隆寺の脇にある大酒（大避）神社と対になっている。近年、地域開発で幾つもの高層住宅が建てられたため、此の泉の水源となる地下水脈が断ち切られたのであろうか、殆ど泉から水は出ていない状態となっている。

20) 夏期休暇中の避暑合宿

5年生の時は吉野で3泊程過ごした。引率の先生から吉野山から大台ヶ原、大峰山へ行く修験者の話や蔵玉堂へ行き後醍醐天皇の南朝にまつわる歴史で、村上義光がこの金峯山寺蔵玉堂で幕府軍を迎え撃ち護良親王が落延びるのを助けたという話を聞き、水分神社へ行って水分をミクマリと読む事やその意味の説明を聞いた。帰る日は雨で大阪近傍は特に大雨だったそうで無事に帰れるかどうか親達は大変心配をしていたと帰宅後母から聞いた。確かに電車から洪水のような光景が見えた。

6年生の時は若狭小浜の海辺に行った。小浜への鉄道はどの線で行ったか記憶が無い。トンネルが沢山あったのは覚えている。海水浴を楽しんだ。校長先生と一緒に泳ぎ浜寺の水練学校の成果でよく泳げ校長先生から誉められた。触ると酷く痛く赤くかぶれるクラゲがいた。食事はおいしかった。海岸一帯は国防の秘密の為、写真撮影ができないとのことだった。山中峯太郎の本「敵中横断三百里」を読破した。1イー、2アール、3サン、4スウと数字を中国語で言うのを覚えた。

21) 秋の運動会

小学校の校庭は運動会ができるような広さではなかった。市内の他の小学校も同様だった。記憶では小4の時から住之江公園の大きな運動場で秋の運動会が行われた。この運動場は広く3つの小学校が分かかれて運動会を行っていたようである。昼食時とか解散時に他の学校が何か指示をする大きな声が拡声器から聞こえて来る。学校名を言っている声を聞いた。その学校名が毎年同じだったので覚えていた。

その声は「セイビダイサン」「セイビダイサンショウガッコウ」と聞こえた。「済美第三小学校」である。

此の学校は梅田、曾根崎の東、太融寺辺りが校区だった。戦後、大阪市立大学理工学部が創設された時に学部の校舎に流用された。此の小学校の卒業生が阪大の物理で私の親友となる杉本健三君である。

2 2) 組長選挙

記憶は怪しいが、たしか5年生から1学期4月と2学期9月に、年に2回正副の組長選挙をした。立候補者なしの人気投票のように、それぞれがなって欲しい者の名前を配られた紙片に書く。投票の前にクラスでは何となくある種の雰囲気醸し出されていて或る1人に集中した票になる。私が選ばれた時の印象では、勉強が良くできるからとか、何かが上手とか、言う事ではなく、前学期からの行動から何となく醸し出される人気の雰囲気がクラスの中に漂い、それを殆どの者が感じていたように記憶している。組長になり判ったのは朝礼や何かの時に整列する際はクラスが一番前に立ち、授業の準備や跡片付けをするのが主で、紫の房が正、黄色の房が副、此れ等を胸に付けていても誰も見向きもしない。授業が始まる時と終る時に、「キリツ、レイ」とクラスの者に号令をかける。それくらいで専ら先生を補助しクラスのために働く小間使いのようなものだった。辞令の立派な証書を貰い、学年末に褒美の鉛筆1ダースをもらうだけで特に良い事は何も無かった。此の我々の投票行動は、我々が1年生から生徒の組み替え無しで同じ組で同じ顔ぶれだったから、5年生、6年生ともなれば、クラス全員の夫々の気心や行動パターンが互いに判っていたからかも知れない。

我々が行なった組長選挙でクラスに何となく醸し出されてくる雰囲気での投票行動は現在の衆参議員の総選挙でも、マスコミ等が醸し出す雰囲気投票先を決める大衆行動となって顕われているように思われる。

2 3) 担任の北川先生ではない先生の授業

5年生、6年生では図工と体操はそれぞれ専門の先生が担当された。図工の時間では地下にある特別室で色々な工作をした。此の部屋には大きな作業機が数台あり万力が取り付けられていて主として木工工作をした。糸鋸を使って板に穴を空けたり、先生が作られた作品を目標に形をうまく切り出す作業だがなかなかうまくできなかった。

5年生の秋、風が冷たくなってきた日の朝礼の時に校長先生から体操の授業を受け持つ男と女の若い先生が紹介された。女の先生は美人で優しそうだった。しかし実際は大変厳しい先生だった。我々の体操の時間にこの二人の先生が徒手体操や跳び箱を使っての模範運動を見せて下さった。

我々の体操は主に雨天体操場でマットを敷き跳び箱を跳ぶことや前方回転をすることだった。身軽に巧みな動作ができる者、体の動きが柔らかくならないでぎこちない動作が一向に改善できない者にと、はっきりと分かれた。肋木を登り一番上でぶら下がる事や、天井から吊り下げられた太い綱を腕力だけで登って行く運動などもさせられた。総じて我々はひ弱な生徒だった。

2 4) 戎橋から心齋橋筋へ

戎橋の歩道にはいつも2、3人のモノモライが葦の上に座っていてお金を入れてもらう箱を置いていた。どの者も鼻がつぶれた醜い顔で皮膚や手足の指が爛れている。父等の説明では梅毒のためだとのこと。お金を恵む人は少ないようであった。

心齋橋筋に森永だと記憶している(違うかもしれない)大きな食堂があった。夏にはその開放された入口に大きな氷柱を立て涼しくみせる工夫がなされていた。大丸やそごう百貨店の入口にも氷柱が置いてあったような記憶がある。

2 5) 戦争の影響

2年生の時に満州事変、3年生の時に上海事件が起こり、満州国が建国され、5年生の時に溥儀満州国皇帝が日本へ来られ大阪市中を自動車を通られる時に歓迎する行列に駆り出された。

国語の読本では「・・・キグチコヘイハ シンデモ ラッパヲクチカラ ハナシマセンデシタ・・・」
というような記述があった記憶がある。授業で直接戦争のことを取り上げられたという記憶はないが、
唱歌では日清戦争、日露戦争に関係する歌を歌った。授業で歌ったのかどうかは定かではない。

上海事件の時に、中国軍陣地に構築された鉄条網を破壊するため3人の兵士が爆薬を入れた筒を自分
らの身体ごと突っ込み戦死した。その行為を美談「爆弾3勇士」として新聞等で誉め讃えた。教室でも
先生が話されたような記憶がある。

唱歌では「煙モ見エズ雲モナク」で始まり「マダ沈マズヤ定遠ハ・・・」と続く日清戦争の黄海海戦
の歌、日露戦争の歌は、「轟ク砲音(ツツオト)、飛び来ル弾丸・・・闇ヲ貫ク中佐ノ叫ビ、杉野ハイ
ズコ、杉野ハイズヤ・・・」の広瀬中佐の歌、「旅順開城約成リテ・・・」の乃木大将とステッセルとの
水師營の会見などの唱歌は全文を覚えていてよく歌った。それぞれの歌は戦争をある意味で美化してい
るが、今でも完全ではないが歌詞は覚えている。

唱歌の中でも明治大正生まれの者の心の琴線を最も強く共鳴させる歌が「ココハ御国(オクニ)ヲ何
百里」で始まる歌である。5年生の時の学芸会で北川先生が此の歌のさわりのところを脚色され我々全
員参加の劇となり、舞台裏で女子にも参加してもらってこの歌を歌い、戦死する兵士役の広岡俊夫君が
熱演した。参観の母達は子供の芸なのにハンカチを顔に当てているのが見えた。

我々の父達の年代の者や大正生まれの私達も含めて、いつの宴会でも誰かが必ずこの「ここは御国を
何百里・・・」と歌うのが常だった。

戦後、傷痍軍人がお金を募るのに、白衣を着た数名の集団で1人がハーモニカでこの歌を吹くとたち
どころに大勢の人が募金箱にお金を入れる光景は、街角、省電の中などでよく見かけられた。

26) 2・26事件

叔父は市岡中学一年生頃から視力が落ち、原因が不明で視力回復には魚などの胆が良いと言われてい
て、うなぎや鯉などの川魚が手に入り易い母親(私の祖母)の故郷、徳島の親戚へ卒業前に転地療養さ
せられた。叔父の眼の外見は全く普通の綺麗な眼だが網膜色素変性と言う失明に向かう病気と判った。
治療方法は全く無く、遺伝だと言われていたので、後年に阪大病院眼科で叔父の子供と孫の眼の検査を
した結果、叔父だけに現れた突然変異だと判明した。

叔父は私が小6の時には新聞が読めなくなっていた。東京で軍隊が起こした事件を報じている新聞を
私に音読させた。当時の新聞では記事の漢字には「カナ」のルビを付いていて、小6には難しい漢字や
内容の意味が判らなくても音読はできた。此の音読を続けたお陰で難しい漢字や熟語の読みに慣れた。
数日の間、学校から戻ると新聞を音読することが続いた。事件自体を理解することはできなかったが大
雪の中での軍隊の行動、殺された人、東京市内や市民の様子などを子供なりに知る事ができた。

精華小学校から見える周囲のビルには屋上から「兵士に告ぐ・・・」と大きな文字のアドバルーン
が幾つも上げられていた。新聞に戒厳令が出されていて関西地区への無言の圧力として戦艦長門を旗艦
として数艦が大阪湾に来て示威行動をしているという記事があった。叔父は浜へ行って長門を見ようと
私に連れて行けと命じた。浜からは長門他数艦が隊列を組んでゆっくりと動いているのが遥か遠く水平
線に見えると叔父に説明した。海は寒い西風が吹いていて白波が立っていた。

3月に入っても天候は荒れ模様が続いた。

27) 中学校、商業学校受験への特訓

6年生の時は、精華小学校同年の従妹と一緒に受験勉強をするため、南海電車の羽衣駅の近くにある
叔父の家から通った。

小学校では北川先生が放課後に特訓をされた。先生がガリ版用紙に問題を書く間、我々はじっと待ち、
書き上がると、寿司店の家業を継ぎ受験をしない友人西山君が我々への労力奉仕で謄写版刷りを急いで
して問題用紙を配ってくれた。我々は各自鉛玉代を先生に渡して彼の労力への償いとした。

時には小使室から合図があり、先生が「視学が来たから逃げろ」と言われ、急いで幼稚園の方から校

舎を出てそのまま帰宅した。受験への特訓をいずれの学校でも行なっているらしく大阪市庁から役人の視学官が見回りにくるとのことだった。

秋が深まり日暮れが早くなると、南海高島屋百貨店の電光板が明るく輝き、その文字の動きを見ながら答を考えていた。

校長先生も協力され校長室へ我々を順番に入れ模擬面接をされた。そして面接の時の質問だとして、私の場合は“日歩一銭とは何か”と質問された。私が答えたかどうか覚えていない。翌日北川先生は校長先生の指示により我々に面接の受け方について態度など具体的な指導をされ、校長先生がされた質問への正しい答えを順次説明された。

正月前から市内の方々で行われている業者の模擬試験を受けに行った。その成績が後日、小学校へ送られて来た。北川先生はそんなに幾つも模擬試験を受けに行かなくてもいいと言われた。進学受験準備はこのように厳しいものだった。

28) 電車通学の楽しさ

先にも書いたように私は南海電車での電車通学。難波駅のホームは地上で高島屋百貨店1階の天井が高い大きな広場との境が改札だった。羽衣から通学の朝の電車は満員だったが、帰りの午後は乗客が少なかった。運転手の横で運転の操作を見るのが楽しみだった。下校時間が大体同じ時刻なので羽衣へ行く電車も決まっていた。運転手さんも同じ人で父くらいの年だった。段々と親しくなり話をするようになり、彼はちょっとだけレバーなどの装置に手を触れさせてくれた。

電車が和歌山を越え七道駅から大きなカーブで堺へ向かう所にセルロイドを作っている大きな工場がある。電車の窓を開けていなくても、車内には樟腦の匂いが入り気持ちのよい香りの空気が漂っている場所だった。

車両のドアは手動で駅に停まる少し前に車掌さんが飛び降り前方へ走ってドアを開けて行く。発車の時は前方のドアから順番に閉めて行き、適当な頃を計って発車の笛を吹き、走り出した電車の最後尾のドアへカッコよく乗り込む華麗な動作が夫々の車掌さん毎に特徴があって独特の見せ場のようなものだった。彼らの動作には魅せられた。

29) 同級生の面々

昭和30年頃、森田徳一君から「昭和11年卒業の者の集まりを“にくもり”の店でする」との連絡がきた。北川先生も来られ30人程が集まった。その時に先生に組み替え無しの6年間の教育効果を尋ねた。効果はよく判らないとの事だった。気の合った者が2次会にも出かけた。矢張り子守君は人気者の中心だった。この集まりで旧交が暖められその後、時々幾人かの者は会合を重ねた。学校が廃校となるので最期の大きな集まりが計画された。平成7年3月、学校で122年の歴史の幕を降ろす集まりが行なわれた。

森田徳一

牛肉料理店「にくもり」の御曹司。「すし虎」の東、法善寺との間に店があった。6年生の時、彼は受験への特訓を遅くまでしていたらしく、午後の授業では殆ど寝ていた。戦後早くに牛肉のシャブシャブ店を開いた。幼稚園や小学校の復興に中心となって活躍し、精華校区内の名士となり学校をサポートする種々の委員や民生委員等を務め、我々の集まりの世話や連絡などを一手に引き受けてくれていた。

子守タミ（山村樂正）

彼女は入学前から日本舞踊を仕込まれていたとのこと。地唄舞山村流である。小学生の頃は男子より女子の方が成長が早い。その上彼女は踊りの稽古で体の動きを仕込まれているから筋力は男子より遙かに勝っている。悪坊主がいたずらをするると彼女を連れて来て彼を懲らしめてもらった。彼女は彼を捕まえ引き倒して馬乗りになり手を振り上げた。彼女は名取りとなり山村樂正と命名された。関西での地唄

舞の第一人者、紫綬褒章を受けている。落語の米朝師匠との対談でも小学生時代の此の武勇伝が話題になり彼女の生い立ちの隠れた一齣となる語り草となっている。名古屋の覚王山にも稽古場を持っている。犬山市の西、扶桑町は米朝と樂正を招いた催しを毎年行なっていたが、米朝師匠と樂正との体調を勘案して取り止められた。樂正の稽古場は吹田市にある。樂正は2年前の平成20年12月に膵臓ガンで没した。樂正の跡を樂道が継いでいる。

天牛トシコ

古本屋「天牛」、天牛新一郎の孫、周防町アメリカ村で古書店を開いていたが、本店が江坂に建てられたので、その店を維持しているかは不明。新一郎さんの事は「追記 天牛古書店」として書き留めておいた。(アルス文庫)

美馬（高階）喜代子

女子一番の秀才、医学へ進み高階姓となり久左衛門町大黒橋の近くで夫婦は医院を開いた。直ぐ近くに住んでいた叔母の主治医になっていた。

富士太平

「すし虎」の隣の電器店の御曹司、国語の授業で読本にベートーヴェンがピアノ曲、月光、を作曲した時の話があった。北川先生がピアノ曲月光を聞かせようと、誰かレコードを持っている者はいないかと尋ねられた。富士君が家には在ると答えた。先生が直ぐに持って来て欲しいと富士君に言われ、彼が家に戻っている間に先生は蓄音機を音楽室から持って来られ、富士君のレコードが来るのを待った。その間先生が話された事は忘れていた。さてそのレコードを聞かせてもらったのだが、私は唱歌で先生がピアノを弾かれる外にピアノの音を聴いた事がなかったし、家では祖母が弾く三味線の音やリズムに馴染んでいたが、レコードのピアノは初めて聴く音なので、それが美しいとも何とも判らず、読本に書かれているような雰囲気から全く遠い存在の音だったと記憶している。

富士君は放課後の遊び友達の中で、三角ベース野球ではピッチャーで一番敏捷だった。後に彼は日商岩井の社員となった。

高松安太郎

男子中の成績がいつもトップ、浪速高校尋常科へ進んだ。自宅との通学路に古書店天牛があり、店主の新一郎さんに大層かわいがられていた。彼が店の前を通ると新一郎さんが出て来て呼び止め参考書を次々渡して「よう勉強しなはれや」と言われたと後年のクラスの集まりの時に言っていた。平成11年9月に没。

岸本泰男

小学校正門に向かって左側にある寿司屋「お多福」の次男。日新商業に進み日銀に入り松江支店長を最期に退職し顧問となった。寿司屋は兄に任せていたが閉じたと言っていた。

寺世藤和

今は多分無くなった商売の「髻カモジ屋」の御曹司。髻カモジと言うのは髪の毛に添え加える毛のこと。現在のウィッグである。彼の店は戎橋筋の上町へ行く市電の線路を越え北へ入った直ぐ右側に在った。髻カモジの毛は契約している銭湯の排水路に設えた網に絡んでいる毛を集めて来て洗濯し選別して製作すると言っていた。戦後は息子に店を譲り髻カモジではなく小物の鞆等を作り販売する店になっている。平成9年1月に没した。

広岡俊夫

築港の倉庫業社長になった。5年生の時の学芸会での名演技の当人である。彼の話し方はその演技の時のイントネーションを彷彿させる聲である。

作本頼隆

私が名大で現役の1980年中頃のお盆のある日、彼がふらりと教授室に突然やってきた。広島で自営の商業興信の仕事をしているとのこと。精華小卒後の50年目である。記憶を思い出すのに時間がかかったが、北川先生や森田徳一君のことが話に出て長い空白が一举に埋まった。彼は名前を豊から頼隆に変えていた。彼が言うには年末から奥さんと何処かの山へ登って山頂から新年のご来光を撮影するのが行事となっていると。山は有名でもなく、特に高くもなく夫婦で登れる山で毎年違っていると行って数葉の写真を見せてくれた。また毎冬、釧路湿原へ行き丹頂鶴を撮影し続けていると行って鶴の色々な姿の写真を見せた。

コーヒーを飲みながら話を続け、今度の冬に鶴の写真を撮ったら送ると言って彼は帰って行った。年賀状が5日程遅かったが何処かの山頂でご来光と夫婦の姿と一緒に写した写真付きでやって来た。その3月、大きな判に焼きつけた数葉の鶴の写真が送られて来た。その年から正月にはご来光の写真付きの年賀状が毎年送られて来た。丹頂鶴の写真はその後も送られて来てその一枚は私の書斎を飾っている。彼は平成8年6月に没した。

進藤春二

彼は病氣療養で2年休学し私達の組に入って来た。卒業の年の2月に二上山辺りを震源とする地震が起った。かなり強かった。彼は顔が真っ青になり震えていた。インテリア関連の自営業サンコーマスを経営していたが10年程前に没した。

飯田正博

彼の家は私の家の西数百メートル、休日には彼の家に度々遊びに行った。今宮中学校へ進んだ。家業である電球製造会社を継ぐことになった。電球製造工程を見学させてもらった。私が大学での研究に必要となったネオンガスなどの希ガスの入手についてのアドバイスを受けた。その後も放電関係の知識を彼から多く教えてもらった。此処には書けない個人的な話もあるが彼は平成18年5月に没した。

西山某君

名前を失念している。彼は寿司店の御曹司で、店は[すし虎]から戒橋へ十軒ほど行った西側にある。屋号も失念している。彼は卒業後は店で働く事になっているので、我々の中学受験の特訓を助けてくれる謄写版刷りを一手に引き受けてくれた友人である。戦死したと聞いている。

30) キタ・セクスアリス精華小学校版

その1

体操の授業を受け持つ新任の女の先生は我々には幼稚園以来の女性の先生であった。我々の学年は北川先生の考えで学年毎の組み替え無しで、受け持ちの先生も替わらなかったから、他の先生との接触はなかったので、女の先生が居られたのだろうが我々は気付かなかった。衛生室には1人の女性が居られたが、年に一度のマクニンを飲まされる時に顔を見るくらいであったので、突如として現れた若い女の先生、白いピチッとした体操服を着た、すらりとした姿勢の先生は特に我々男子生徒には眩しく光り輝いて見えた。授業は女子の組を受け持たれたので男子組の我々は女子組を羨ましく見ていた。授業の準備ではいつもこの新任の二人の先生が一緒になってマットを敷いたり、跳び箱を持ち出したりされていた。我々の眼にも目立つ程の親しそうな行動は仲の良さを越えて何かを想像させる二人に映った。我々男子生徒はこの二人の先生の行動に大なる興味を持ち、二人の関係について、あることないこと勝手な噂話をしていた。某君が二人の後を付けて行ったと称して「手をつないで中座の前を歩いていた」と

誇らしげに言う。別の某君は「昨日二人が松竹座に入って行った」とか「もっとひつついて歩いていた」とか言い触らしていた。そして妖しげな想像を言いあっていた。

その2

小学校の東の千日前に大劇という大きな劇場がある。宝塚と同じように女性集団が踊りや劇の興行をしている。親父が劇場の大きな看板の額に出し物の絵を描くことや舞台装置の色塗りをしているので、その息子らは旨く潜り込んだらしい。見回りの者に見付かる前にラインダンスを見上げていたらしい。彼らの1人がクラスで「うまく入れた」と自慢をし「見たぞ」、「見えた、見えた」と得意げに言いふらす。「本当か？」と皆は羨ましそうに言う。何を見る為に劇場に潜り込み何を見ようとしたかはご想像にお任せする。ちょっとしたキタ・セクスアリス精華小学校版の一齣である。

3 1) 中学受験合格

住吉中学校受験日はいつだったか覚えていないが、無事合格した。友人もそれぞれ今宮、高津、鳳の中学校、浪速高校尋常科に入った。府立中学校は合格発表日が同じ日だった。全員が北川先生へ報告に来ていた。

3 2) 地下鉄御堂筋線

私の小学生時代に見聞した大阪市営地下鉄御堂筋線工事の事を書いておく。

御堂筋での地下鉄建設工事の様子をよく覗いて見ていた。

精華小学校の閉校記念誌「122年のあゆみ」平成7年3月発行によれば、御堂筋拡張工事が大正15年に第一次都市計画広路第1号線として始まり、幅5メートルの御堂筋を43.6メートルにし、地下鉄を走らせる計画であった。第7代大阪市長関一ツメが此の計画を出した時、市民の大半はキチガイかと驚いたという。市会はようやく此の計画を認め、大阪市交通局資料によれば、昭和5年1月29日に起工式が行われ工事着工。当初第1号線-御堂筋線-は江坂から我孫子までを計画、地下鉄の構造はニューヨーク地下鉄を見習って急行線を作り副副線とし、駅の大きさは将来を見越して当時の車輛1輛の長さ17mで12両編成に対応するように設計され建設が進められたと記述されている。後年それは過剰投資過ぎるとして中津以北と大国町以南は8両編成対応に縮小された。現在の18m車輛10両編成対応の駅構造が最小手直しで実現できたのは当初の構想で建設されていたことの恩恵であり、梅田駅と難波駅の拡張工事でも地上設備を殆ど手直しせず実現できたと記載されている。トンネルの断面は天地方向に余裕を持つ設計であった。これは郊外区間はパンタグラフを使い地下区間はそれを折り畳む車輛が走る計画に合わせたもの。これも結果として冷房化の車輛設計を易しくすることになったとある。

さて、当時の土木技術は未熟だったため、梅田付近の地質が非常に悪かったこともあり梅田駅建設時の崩落事故や淀屋橋駅北側の堂島川と土佐堀川からの漏水による崩壊事故など大規模な事故に見舞われた。これは土佐堀川・道頓堀川・長堀川などの運河が機能していたため、それらを封鎖せずに地下鉄を建設する技術が求められるなどかなりの難工事であったが、しかし結果として日本の土木技術の向上に大きく貢献することとなったと記述されている。

梅田駅及び江坂への地下工事により省線の高架支柱が沈下し、東海道線で最も勾配が急な坂ができたことと新聞が報じていた。また阪急百貨店前の御堂筋側の道路も沈下し、阪急電車梅田駅ホームへの階段が数段増えた。

建設工事を眺めていた記憶では御堂筋の両側に長尺で幅50cm位の鉄板を次々と側面を重ねるように打ち込み側壁とし、地面を人力で掘下げる作業であった。鉄板打ち込みは円筒状の錘を引っ張り上げて、ある高さから鉄板の上へ落とす原始的な方法。ガンガンという騒音と共に起る地響きが昼も夜も休みなく続いていた。

小学生4年の昭和8年、車輛が御堂筋の本町付近から釣り降ろされている写真を新聞で見た。資料によれば昭和8年5月20日に梅田-心齋橋間が開通した。6年生の昭和10年10月6日に梅田駅本駅が開業、10月30日に難波まで開通した。全区間10銭。早速乗ったのを覚えている。

3 3) 戦後の精華小学校

後年のことだが、戦争末期、精華小学校の周りの家が強制的に壊され防火用空間が作られていたので学校は無事に焼け残った。戦後しばらくの間、区役所の別館となった。また講堂は落語や演芸など市民への娯楽を提供する会場となった。

南の繁華街が復興し学童が戻って来た。昼食の給食が始まった。しかし、朝食を食べずに来る学童が多いことが分かった。学童の親の殆どが飲食店や飲み屋の店主で早朝近くまで営業しているので、子供が登校する時刻前に朝食が準備できる状態ではなかった。子供は何も口にせず登校することになる。学校では此の状況に気付き、朝の給食を始めた。

世の中の変化が激しく、市中の空洞化現象で学区内に店舗を持っていても住居を郊外に構える人達が増え、学区内に住居を持つ人の数が年々減り続けた。精華小学校では生徒数が特に減少し先生の数が生徒の数より多くなり、授業は二部教育が常態となってしまった。

その後も益々児童数が減少し、精華小学校と隣の大宝小学校と共に平成7年(1995年)4月1日に南小学校として統合された。精華小学校校舎は現在も昔の姿で残っている。